九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

革命前ロシアにおける経済地域区分研究 : その概観と今日における評価について

小野, 菊雄

https://doi.org/10.15017/2244513

出版情報：史淵. 95, pp.17-53, 1966-02-15. 九州大学文学部
バージョン：
権利関係：

革命前ロシアにおける経済地域区分研究

——その概観と今日における評価について——

小野菊雄

はじめに

この小文において筆者は、十月革命前すなわち帝政ロシア時代における経済地理的研究の内、とくに一八世紀から二〇世紀初めに至る間に著わされた経済地域区分に関連したいくつかの研究について概観すると共に、現在ソ連においては、これら革命前の研究に対してどのような評価がなされているかを紹介してみたいと思う。

筆者としてはこのような概観・紹介が、今日のソ連経済地理学における経済地域区分問題——それは生産の地理的配置の問題と並んでソ連経済地理学の最も重要な研究課題となっているのであるが[1]——を考察する上に必要なのはもちろんのこと、更に筆者も若干紹介してきたところの最近のソ連経済地理学界の中での論争、すなわち経済地理学を地理的科学の一部門であるとするいわゆる「単一的地理学」（edinaya geografiya）を主張する人々と経済地理学は経済的科学の一部門であるという従来からの一般的見解を主張する人々との間の論争を[2]理解する上にもいくらか役立つものであろうと思うのである。何故ならば、筆者がこれまで目を通すことのできたいくつかの論文からみるならば、革命前の経済地域区分研究に対する評価については、この論争における両者の間では明らかに異なるものがあるからである。

ただこれらの問題に関する資料、とくに古い資料を未だ充分に手許に集めることができないために、その概観および紹介も非常に不充分なものになってしまう可能性が多分にあるが、この点読者諸兄姉のご寛容をいただければ幸甚である。(3)

一

さて、ロシアでは古くから諸地方についての記録が種々の形式で存在していたが、一八世紀初めピョートル一世（Pyotr I）の時代に至って、国全体あるいは個々の行政地域に従って様々の事情を記録するという形式、いわば「記述的国家誌」（opisatelinoe gosudarstvovedenie）というべき著述が生まれてきたのである。(4)

こうした著述の中でロシア経済地理学史上まずあげられるのは、一七二七年イ・カ・キリロフ（I. K. Kirilov, 1689—1737）が編集した「全ロシア国家の繁栄せる状態」と題する書である。この書は県（guberniya）や郡（provintsiya）という行政単位ごとに住民・産業・交通などについて記したもので、当然その中に今日の経済地理的研究とあい通ずるものを有していたとされるのであるが、(5)更にロシア経済地理学史においては、彼と同時代の人であるヴェ・エヌ・タチシチョフ（V. N. Tatishchyov, 1686—1750）の諸研究も注目されるのである。タチシチョフはその著作の中で、地理学は国のあらゆる土地についての全般的記述をおこなうものだとし、更にその中における数理的面・自然的面・歴史的あるいは政治的面に関する記述といった区別および政治的記述は集落・風習・その地方の住民がとくにすぐれている技術等々を記すものであるというような各々の面に対する定義などについてふれたのであり、このような研究によって、彼は地理学の中にいわばはじめて理論的問題の存在を考えた人であるともみられているのである。(6)しかし更にその後、キリロフやタチシチョフの研究成果を受け、その上に自己の独創的な研究活動を加えてロシア経済地理学を確立したのは、有名なエム・ヴェ・ロモノーソフ（M. V. Lomonosov, 1711—1765）である。

ロモノーソフの研究活動が化学・物理学・数学・鉱物学・地質学・地理学・文学等々の非常に広い範囲にわたっており、しかも各々の領域においてすぐれた成果を残したことから、今日、彼は帝政ロシア時代における最も偉大なる学者であったと評価されていることは周知のところであろう。(7)

ところで、地理学だけでもこれまた広い範囲にわたった彼の研究活動の内、その経済地理的研究に関するものについて簡単にみてみると、(8)まず一七四九年に、地理学は人類がその富について互いに知り合う上に最も役立つものであると述べたことは、彼が経済地理的研究に与えた一つの定義として考えることができるのであるが、更にやや後に、中央から各郡にいわば特派員を派遣して農業に関する情報を集め、それに基づいてロシア農業の地域的差異を研究する国家機関を設立しようという計画を示したといわれる点からすると、ロシア経済を研究する際には、各地方が有する互いに異なった意義をも検討する必要があることを彼がある程度考慮していたことがうかがえると言えるのである。(9)

またロモノーソフは、一七五八年からその没年に至るまで科学アカデミー地理部門の指導者として活躍し、ロシアの新しい地図帳と各地方の地図を編集することなどを企図したのであるが、その際彼は、その地図帳に「シベリアを含む全帝国の政治的・経済的記述」というテキストを添付すること、すなわち経済的資料を地図に反映させることを考えたようである。(10)このようにロモノーソフは経済現象に関する地理的研究に注目し、この面の研究に対して一七六〇年代はじめに「経済地理学」（ekonomicheskaya geografiya）という名称を与えたのであり、(11)この点からも今日彼はロシア経済地理学の創始者と考えられているのであるが、更にその経済地理的研究において重要なのは、六〇年代初めに彼が作成した三〇問から成るアンケートである。すなわちロモノーソフは、各地方から回収したアンケートを前記の地図帳編集の際に基礎資料として用いることを意図して三〇問の質問を作成したのであるが、その質問の多くは工場（fabrika）・手工業（remeslo）・商業・水路を主とした交通・農業・農民の副業（promysel）・都市に関する様々の特色・住民の民族構

成などの経済的現象に関するものが多かったのである。[12] 要するにこのアンケートあるいは一七六三年の彼の著述[13]などからみると、ロモノーソフの関心は主にどこで何が生産され、またそれがどのようにして互いに交換されるのかという点にあったようであるが、それを各地方から回収したアンケートなどによって研究しようとしたことは、前記のように彼がロシア経済の地域的研究、換言すればロシア経済の地域的差異についての研究という方向を志していたとも言えるのであり、そのことはまた、彼の頭の中にロシアの経済地域区分に関連する観念が芽生えつつあったことを物語っているとも言えるのである。

ロモノーソフがこのようにロシア経済の研究に努力したことは、彼が封建的農奴制社会の中に商工業という新しい経済活動の萌芽をみてとり、その発展を促そうと考えていたことに一つの要因があったという評価もなされているが、[14] それはとも角として、彼によって提示された経済地理的研究の概念は、彼とほぼ同時代の人であるペ・イ・リィチコフ（P. I. Rychkov, 1712—1777）のオレンブルグ地方研究、エフ・イ・ソイモノフ（F. I. Soymonov, 1682—1780）のシベリアを六地方に区分しての研究、更に一八世紀後半におけるハ・ア・チェボタリェフ（Kh. A. Chebotarev, 1746—1815）やエス・イ・プレシチェーフ（S. I. Pleshcheev, 1752—1809）の教育的面に重点を置いたといわれる地理的研究、ア・エヌ・ラヂーシチェフ（A. N. Radishchev, 1749—1802）の研究等々によって発展していったのである。[15] ところでこれらの研究の中で、経済地域区分との関連においてとくに取り上げねばならないのは、ア・エヌ・ラヂーシチェフによる研究であろう。

ラヂーシチェフは一八世紀後半のロシアにおける作家・詩人であると共に、専制的農奴制社会機構に常に反対を唱えた思想家でもあったことは周知の事実であろう。[16] 彼の代表的著作としては、当時の一般人民の窮乏を記し、農奴制の廃止と農奴の解放を世に訴えたために、激怒したエカテリーナ二世（Ekaterina Ⅱ）によってシベリアへの十年間の流刑に処せ

られる原因となった「ペテルブルグからモスクワへの旅」(一七九〇年)があげられる。[17] その後のロシア文学に大きな影響を与えたといわれるこの書は、また当時のロシア経済についても若干の知識を与えてくれるものであるが、その他に流刑地シベリアにおける住民やその職業・社会関係などについての彼の記述も、その経済的研究活動の一面を示してくれているのであり、更に一七九一年三月に彼がア・エル・ヴォロンツォフ（A. R. Vorontsov）に書き送った手紙は、とくに経済地域区分の問題に関連して非常に注目すべきものなのである。[18] すなわちラヂーシチェフはこの手紙の中で、第一に自然だけでなく経済的状況によっても、また互いに区別されるところのロシアにおける様々の地域を明確に示しうること、第二に一七七五年に設定された行政的地域区分と一八世紀末のロシア経済の地域的差異との間には食い違う点が多く、それ故に行政的地域区分を経済の状況に合うように変更する必要があること、第三にこのような経済の地域的研究あるいは地域区分というものは、官吏（chnovnik）ではなくして、研究者が客観的認識に基づいておこなうべき仕事であるということ等々の見解をあらわしたのであるが、このような考えは経済地域区分に関する原則的問題をはじめて提示したものとして注目されるのである。

エカテリーナ二世没後、一七九七年にその所有地へ移されたラヂーシチェフは、更に一八〇一年アレクサンドル一世（Aleksandr I）の即位と共にペテルブルグへの帰都を許され、直ちに新法令制定のための委員会に委員として迎えられたのであるが、この仕事に関連してまた一つの論文を著わしたのである。その論文において彼が意図したところは、新法令制定に際して、まずロシア各地域における経済・社会状態を明確にすること、すなわち各地域の農業生産物・農業技術・工業生産高、そして何よりも一般人民の職業・収入・生活状況を調査することであり、それによって農奴制社会における一般人民の苦しみを明るみに出していくことであったといわれる。[19] こうした彼の考えからみれば、この研究もまたロシア経済の地域的研究につながるものであったと言えるのであるが、結局彼自身は、ロシア帝国の体制に反対するようなこ

うした計画を提出したことによって、再びシベリアへの流刑という脅迫を受けることとなり、遂に一八〇二年自らその命を絶ってしまったのである。

要するにラヂーシチェフの経済的研究もその文学作品同様、彼の社会思想との関連の上におこなわれたのであるが、このような当時のロシアの政治体制に対する彼の批判に関連して更にふれておかねばならないのは、彼が行政的地域区分改革の必要性を指摘したということであろう。すなわちピョートル一世以前のロシアは、行政的には区（okrug）・郷(uezd)・軍管区（voevodstvo）・地方長官管区（namestnichestvo）・都市（gorod）などに区分されていたが、一七〇八年ピョートル一世は、行政監督および租税徴収を容易ならしめることと軍事上の配慮から行政的地域区分を改め、全ロシアを八つの県に区分したのである。[20] しかしこの区分は約七〇年後の一七七五年に至って、エ・イ・プガチョフ（E. I. Pugachyov)の指導する農民反乱（一七七三―一七七五年)に衝撃を受けたエカテリーナ二世によって再び改められたのである。すなわち彼女による改革は、若干の県が余りにも広大であるために、これら諸県への官庁・行政官の配備が充分にいきわたらない点を改めるという目的、いわば行政監督のより一層の強化という意図の下におこなわれたのであり、その区分の基礎には、一県の人口は三〇万から四〇万、一郡の人口は二万から三万とするという数的原則を置いたのである。[21] こうして設定された約五〇の県とその下の区劃としての郡という行政的地域区分組織は、十月革命後の一九三〇年頃まで約一世紀半の間ほとんどそのままの形で続いたのであるが、しかしこの区分は、前記のように行政監督強化のためにのみおこなわれたものであり、国内の経済状態あるいはその地域的差異などは全く考慮しなかったために、一世紀半の間には、新しく形成・発展してきた経済地域との食い違い、たとえばある単一の工業地域が二つの県に分割されていたり、あるいは大きな工業中心を持つ集落が村（selo）と呼ばれ、それより小人口の郡都の下に行政的に従属するというような現象が生じてきたのである。[22] 前記の手紙にもあるように、ラヂーシチェフはすでに一八世紀末の行政的地域区分設定当時か

ら、将来、こうした行政的地域と経済的地域との食い違いが生じることを指摘し、行政的地域区分は人口数のような形式的なものによるのではなく、各地方の自然条件や経済条件、とくに後者を考慮しながら決定する必要があると主張したのであって、[23] ここに行政的地域区分と経済的地域区分との関連性という今日にもつながる問題がすでに提示されているとも言えるのである。なお、こうした行政的地域区分改革については、後にデカブリスト（dekabrist）の人々、たとえばエヌ・エム・ムラビョフ（N. M. Murabiyov, 1796—1843）やペ・イ・ペステリ（P. I. Pesteli, 1793—1826）も民族構成などの観点から注目すべき見解を示したようである。[24]

一八世紀中葉の農奴制社会の中に新しい経済的要素の発展をみてとったロモノーソフが、その解明のために、従来のような単なる記述や統計の羅列に代る新しい研究方法、すなわち地域的考察を伴う経済地理的研究の概念を提起し、その後ラヂーシチェフが、その中から経済地域区分に関連する概念を発展させようとしたのであるが、彼らの見解はあるいは未だ確固とした理論を形成するというまでには至っておらず、また当時の一般的見解として普及しえなかったとも言えるであろう。[25] しかし、その後の一九世紀におけるロシアの経済地理的研究の発展を考えるならば、やはり二人の研究はロシア経済地理学史上に大きな意義を持つものであったと言いうるのである。

二

ところで一八世紀末から一九世紀初めのロシアでは、新しい経済的要素、すなわち工業の発展、農産物の商品化の増大、それに伴う商業およびその中心としての都市の発達などの動きがみえはじめたのであるが、このようないわば資本主義的要素の発展は、一方では農奴の身分のままの賃金労働者を増加させることによって、農奴制社会機構との矛盾の激化を招くと共に、他方、ロシア国内に新しい工業地域あるいは農業地域の形成を促していったのである。[26]

こうした動きを内包するロシア経済を全体としてあるいは各地方について詳細に認識することは、国家にとっても商工業資本家にとっても、行政監督その他種々の点から緊要の問題と考えられたのであるが、そのためにはまず、豊富な経済地理的資料の収集とそれに基づく経済地理的著作・教科書・事典などの出現が必要とされたのである。たとえば、すでに一八世紀末に出されたプレシチェーフの著作やエム・デ・チュルコフ（M. D. Chulkov, 1743—1793）のロシア商業に関する百科事典などはそのような要求に答える一つの例でもあったが、一九世紀に入ってからは、豊富な資料や統計を基礎にした国家誌とでもいうべき「統計字」（statistika）が、前記のような必要に応ずる研究部門として発展してきたのであり、そしてこの「統計学」が、統計や資料の単純な記述と共に、広汎な新しい資料に基づく詳細な経済地理的研究や経済地域区分研究、すなわち今日の経済地理学的性格をも包含していたのである。[27] このような統計学的研究の中から経済地域区分研究との関連において常にあげられるのは、カ・エフ・ゲルマン（K.F.German, 1767—1838）とカ・イ・アルセニェフ（K. I. Arseniev, 1789—1865）の諸研究であろう。

政府機関や科学アカデミーにおいて政治経済学および統計学の研究に活躍したゲルマンは、統計学は産業・科学・芸術・住民の状況・法律等々国家に関するあらゆるものを対象とする政治科学であると考え、ロシアにおける統計資料の整備や政府諸機関での産業・人口などの分野の地図作成に努めたのであるが、とくにその人口についての研究は今日でもよく知られているところである。ところで彼はその諸研究の中で、人口・都市・産業その他の面から各県についての特徴づけをおこなったりしているが、一八一九年の著述ではロシアの人口・民族構成・都市住民などの問題にふれ、更に人口調査資料を地方あるいは県ごとに歴史的に比較し、そして各地方の人口増加をその気候条件との関連において概観するために、気候や土壌の性質などによってロシアを八地域に区分したのである。[28] ゲルマンが、従来のような緯度などによって地域区分するという単純な方法を否定して、とも角もこのように気候などの自然条件を明確な指標としながら人口という経

済に関連した現象を研究するための地域区分をおこなったことは、経済地域区分研究史の上でかなりの意義を持っていると言えるのであるが、更にそれを発展させたものとして注目されているのがアルセニェフの研究なのである。[29]

さてアルセニェフは、一八一八年から翌年にかけてそのいくつかの研究を発表しているのであるが、その中で彼はゲルマンと同じく統計学を政治経済学と考え、諸地方から多くの統計資料を収集することおよびそれらの単なる羅列ではなく、それらに対する分析や経済的評価を与える必要があることを主張し、更に少数ではあるが明瞭な特徴によって各地方の性格を確認できることとロシア国内の多様な産物についての概観が容易にえられるということのために、気候・土壌・自然の産物・産業における類似性に基づいてロシアを一〇の地域（prostranstvo）に区分したのである。[30] 彼はまたこの地域区分の上に立って、豊富な資料による各地域の特徴づけをおこなったのであるが、ここで一つ注意しておくべきことは、彼のこの地域区分の場合、前記の目的からも若干わかるように、「学ぶ者に大きな便宜を与える」という教育的あるいは啓蒙的意図が大きな要因をなしていたとみられることである。[31] すなわち当時のロシアでは、行政・財政・経済・法律・風習・科学等々あらゆる分野についてのひと通りの知識を互いに何らの関連もなく盛り込んだ地誌が、いわゆる啓蒙のために多数出版されたといわれるが、アルセニェフの研究もその例にもれず、理論的面よりも啓蒙的面が強いものになったと思われるのであり、それ故に彼のこの地域区分は、自然的条件もあるいはその他の条件も一緒に考慮した上でおこなわれたのであって、そこから更にこの地域区分は、いわば経済地域区分の一つ前の段階であり、しかも経済地域区分の発展には必須の形式だったともみられる一般地理的地域区分であったと考えうると言われているのである。[32] またその他に、アルセニェフが自然的条件と経済的条件とを共に考慮したねらいは、ロシアの自然の産物を経済的発展に結びつけることにあったのであるが、しかし結局こうした考えは、自然の産物を基礎にした自由な商工業の発展の必要性を認め、農奴制に対する批判を生み出す考えにつながっていくことになり、それがためにこの研究は、羅列的統計に批判を加えた彼の態

度と共に、当時の保守的学者の非難の的とされ、遂にアルセニェフはペテルブルグ大学の教壇を去ることを余儀なくされる結果になったのだという分析も出されているようである。(33)

しかしその後アルセニェフは、一八二〇年代末には皇太子アレクサンドル二世（Aleksander II）の家庭教師となり、更に三〇年代には政府統計機関の指導者となったことによって、種々の国家機関から豊富な統計資料を入手し、それを利用することが以前よりも一層容易になったのであり、それがやがて、ロシア経済地理学史上からみて、彼の最も重要な研究といわれる一八四八年の著作「ロシアの統計的概説」として実を結んだと言えるのである。彼はこの書において、「個々の県の存在」を支えている「資力」（sposob）についての研究の必要性を主張し、更にこの特徴、すなわち「ある地方の住民の活動が何に向けられるべきか。そして実際に向けられているか」「住民がその自然から何を引き出しているか。またどのような職業（zanyatie）や副業（promysel）が彼らの生活や食糧を保障しているのか」ということによってロシアの諸県を分類せねばならないとしたのである。こうして彼は以前のものを修正した新しい地域区分をおこない、自然的および経済的面から各地域の特色にふれていったのであるが、三〇年前の彼の地域区分が教育的目的を主眼とするものだったと考えられるのに対し、この地域区分は、明らかにロシア経済の地域的特色の研究を主要な目的としているとみられるのであり、この意味において彼のこの二つの研究の間にはかなり本質的な違いがあるとされているのである。(34)

一八四八年におけるアルセニェフのこのような研究は、いわば彼が以前の一般地理的地域区分から、経済地域区分により近い形式の研究に進んだことを示しているとも言えるのであるが、ここにおいて問題となるのは、彼のこの研究に大きな影響を与えたといわれるエヌ・ペ・オガリョーフ（N. P. Ogaryov, 1813—1877）の研究である。オガリョーフは一九世紀中葉の詩人であり、また友人ア・イ・ゲルツェン（A. I. Gertsen）と共にロシア専制政治打倒のために活躍した人として有名であるが、彼はその社会運動との関連において、一八四〇年代後半からロシアの経済的諸問題の研究に努めた

のであって、中でも経済地域区分研究にはじめて理論的基礎づけの問題を提起したことによって、ロシア経済地理学史上最も重要な研究者の一人とされているのである。[35]

三

さてオガリョーフがその研究をはじめた一八四〇年代前後のロシア経済は、前記のように一八世紀後半から次第に発展をみせはじめた資本主義的要素が、工場制工業の発生とその増大、農業への商品貨幣経済の一層の浸透、国内市場の発展などとして間断ない成長を示していたのであり、当然それに伴う地域的分業の現象が益々顕著にみられるようになっていたのである。[36]そこから当時の経済研究者達のみならず、政府もまた資本主義的要素と封建的農奴制との間の矛盾の激化という状況から何とか出口を求めようという意味もあって、以前よりも一層ロシア経済の地域的特色に対する研究に努力したのであり、そのため一八四〇年代から五〇年代にかけては、政府や個々の研究者によって、ヨーロッパ・ロシアを中心とする経済各部門についての地図などが多く出版されたのである。[37]そしてこうした地図や論文としてあらわれてきたロシア経済の地域的特色に対する研究は、当然ロシア経済地域区分の問題に関連していったのであり、事実この頃には地域区分に関する論文が盛んに発表されるようになったのであるが、[38]オガリョーフはこのような状況の中で、その社会思想に基づいてロシア経済の研究に入っていったのであって、一八四七年に雑誌「モスクワ通報」（Moskovskie vedomosti）第一一六号に発表した論文は、経済地域区分に関する彼の最初にして最も重要な研究として注目されるのである。

「『ロシア帝国の統計的分割の試み』と題して『モスクワ通報』第九八号に掲載された論文への批判」というこの論文[39]において、彼はそれまでの地域区分研究に対する批判と自分自身の考えを提示したのであるが、その中からまず彼が「統計的分割」（statisticheskoe raspredelenie）、すなわち今日の経済地域区分にたずさわるところの統計学、すなわち現在の

経済地理的研究をどのように考えていたかについてふれておくことにする。

まずオガリョーフは、それまでの統計学は分析や解釈や結論なしに資料を収集し、それを平凡に記述しているにすぎないものだと批判し、統計学は国家の物質的また生産的諸力の発展の原理に関する科学であり、「国家がそれによって成立し、国家のより一層の発展がそこからはじまるところの諸要素を分類すること」、換言すれば生産力による国家の区分にたずさわるべき科学であるとしたのである。更にそのことから統計学は、生産的諸力などについての認識の手引きであるところの政治経済学の見地に従うべきだとし、政治経済学への従属あるいは政治経済学から統計学への浸透なくしては、統計学は全く空文となり、平凡な諸事実に関する平凡な記述にとどまってしまうことを指摘したのであり、またそれが国家の歴史の結果としての国民経済の現状を研究することによって、歴史学とも密接な関連性を有しているとしたのである。[40]

このような考えに立って彼は、地理的位置・自然・民族・住民の職業などに基づいたという「モスクワ通報」第九八号の地域区分は、[41]実際に形成されている経済的特色からすれば、同じグループに入れられるべきではない若干の県が同一グループに入れられているなど、何らの明確な科学的原則に基づいていないとし、こうした科学的根拠の薄弱な地域区分は、結局、自然・経済の種々の部門の名称を無秩序に並べたものにすぎないと批判したのである。[42]更にまた彼は、彼以前の地域区分を三つのタイプに区別したのであるが、その内の第一のタイプは「数学的・地理的」(matematicheskoe・geograficheskoe)地域区分とでも言えるもので、各地方の住民の活動や生産力について示唆してくれるようなものは全く記さず、たとえば東・西・南・北という非常に単純な指標で満足しているようなものだとし、通常ロシアでおこなわれているこうした地域区分は、全く外面的で科学というものにはほど遠い概念に基づいていると批判するのである。次に第二のタイプは、様々の事象による系統のない地域区分あるいは国の生産力の差異を考慮しない地域区分であって、たとえば緯度による位置や森林の多少などで区分したり、歴史的事象によって区分していたかと思うと、途中から急に民族的事象による区分に変

わったりするような地域区分であるとし、また第三のタイプは、国の生産力の内の一分野だけというきわめて一面的なものではあるが、しかしその分野に関してはかなり系統的な地域区分をおこなっているものであるとしたのである。[43]

オガリョーフはこのように従来の地域区分を三つのタイプに区別したのであるが、その内の第三のタイプの例として、一八三四年の「農業新聞」（zemledelicheskaya gazeta）第一号に発表された研究、すなわち農業の発展に関連してロシア各地方の気候について考察し、それによってロシアを八農業地帯に区分した研究[44]をあげ、これがとに角、気候という明確な原則の上に立って農業に関する組織的な地域区分をおこない、ロシア農業の概観を知る上に多くの役割をなしえていると評価したのである。しかし彼はそういう肯定的評価を一応与えた上で、この地域区分がもっぱら農業のための自然的条件のみを考慮して経済的条件にはふれておらず、また農業以外の経済諸部門についても全くふれていないという欠点を持っており、結局、農業だけによる地域区分では社会的活動全体を概観することは不可能であるが故に、それは一面的であり不自然なものでしかないということを指摘したのである。[45]

要するに彼は、地域区分を含む従来の統計学的研究は、国家の歴史の記述や民族の記述だけで、国の生産力や産業の動きなどについて何も示唆していないような研究、すなわち真の意味の統計学とは何らの関係もないようなものが多く、また経済各部門別の地域区分研究の中には見るべきものもあるが、それとてもやはり一面的性格という欠点を有しているとしたのであり、こうした考えに基づいて、地域区分に関する彼自身の見解を提示したのである。

きてオガリョーフは前記のように、統計学は国の生産力・産業の発展・社会的活動の発展などについての知識を与える必要があり、ここにおいてそれは政治経済学と不可分の関連性を有するとしたのであるが、その統計学がおこなう「統計的分割」、すなわち今日の経済地域区分は自然的条件や民族的差異によっておこなわれるべきものではなく、各県あるいは各地方それぞれに認められるありとあらゆる種類の、しかも各々が県や地方によって異なる価値を有しているところの生

産力の中から最も優越しているもの、すなわちその地方に存在している最も重要な「生産能力」(proizvoditelinosti)、他のすべての生産力がそれを保持するために結合されているような「生産能力」を見つけ出し、それらを関連づけていくことによっておこなわれるものだとしたのである。[46] つまり彼によれば、たとえば「農業やマニュファクチュア(manufaktury)はモスクワ県（Moskovskaya guberniya）にもタムボフ県（Tambovskaya guberniya）にも存在している。がしかし、前者ではマニュファクチュア工業が主要な活動をなし、商業の対象となっているのに対し、その収穫がこの地方を養うのにさえ不十分な農業は第二義的な活動にすぎない。一方後者では農業が富の主要な源泉であり、商業の対象であるのに対し、マニュファクチュア工業は取るに足りないものにすぎない」[47] というような事実に注目する必要があるというのであり、要するに各地方それぞれのあらゆる社会的活動を分析し、その中から各地方の条件に従って形成されている最も重要な活動面を見出し、それを基にして諸地方を「接近」（sblizhenie）させていくことが、ありのままの地域区分をおこなう上に一番大切なのであって、このようにすれば同一の「専門」（spetsialinosti）は必然的に同一のグループに分類されうると主張したのである。[48] オガリョーフのこの考えは、生産力の地域的専門化あるいは地域的分業が経済地域区分の基礎となるべきことを指摘したものだとも言えるのであるが、その他に彼は、地域区分に際しては、地域形成要因としての交通条件、各地方の社会経済的関係、歴史的条件などの意義も考慮する必要があるとし、更にこうした「同質の基礎の上に成長したところの同種類の活動の接近」こそが地域区分研究の基礎であり、また各地方の持つ実際的意義や全国に対する明確な認識に到達しうる唯一の方法であるが故に、この基礎の上に立たないで、偶然によったりあるいはその他何らの科学的原則もなしにおこなわれているような勝手な経済的又は行政的地域区分は、決して統計学的研究として考えることはできないものであるということを強調したのである。[49]

一八四七年のオガリョーフの論文は、科学としての統計学、すなわち今日の経済地理的研究の概念を発展させ、その理

論に基づいて、国民経済における各地域の専門化又は地域的分業を「統計的分割」、すなわち今日の経済地域区分研究の基礎とする方法論を提示したものと言えるのであり、こうした点からみて彼のこの論文は、単なる地域網の変遷としてでなく、理論的発展の上からロシア経済地域区分の歴史を取り扱う時、革命前における最もすぐれた業績の一つとして評価されるべきだと考えられるのである。更にまたこの論文は、前記のように一八四八年のアルセニェフの研究や五〇年代に盛んに出版されたテキスト添付の産業別経済地図などにも多くの影響を与えたといわれるのであるが、正にこの一九世紀中葉における経済地域区分は、オガリョーフの研究によって、それまでのいわば一般地理的地域区分の形式から大きく発展をみせはじめたとみることもできるであろう。

ところでオガリョーフは、一八四七年以後もたびたび地域区分の問題にふれているのであるが、それらの内の多くは、いわばラヂーシチェフやデカブリストの人々の流れを汲む研究、すなわちロシアの行政的地域区分の改革に関する研究であった。たとえば一八五六年に彼は、行政的活動強化のために政府によっておこなわれた行政的地域区分は、今や同一の関心を持つ地方が分割され、異なる関心を持つ地方が同一グループに入れられているような勝手な区分、役人達が行政的「強奪」(grabyozh)を欲しいままにするような区分になっているとし、このような機構に代るところの「連邦的区分」(soyuznoe delenie)についての考えを示しており、また五九年にはロシアを九つの連邦(soyuz)に区分する考えを、更に六一年には工業・農業・商業・交通・民族などの点を考慮して八〜一〇の地方に区分する考えを示しているのである。[50]

その他に彼は、ロシアにおける革命的組織の活動という見地からの地域区分研究などもおこなったようであるが、[51]要するにその行政的地域区分改革の考えが、ロンドンにおいて、ゲルツェンと共に帝政打倒に努力していた彼の社会的活動や前記の経済地域区分研究と密接につながっているものであったことはいうまでもないことであり、また将来、官僚的な行政的地域区分を崩壊させたならば、その後にはロシアをありのままの経済的・民族的差異に従って区分し、同時にそれが

行政的地域区分の枠を意味するような機構を実施しなければならないという考えを示したことは[52]、経済的地域区分と行政的地域区分との関連の必要性を示唆したものとしてみることもできるであろう。しかし一八五〇年代そして六〇年代と地域区分問題に取り組んでいたオガリョーフも、ただ一八五六年からは、ロシアから遠く離れた亡命地ロンドンにおいて研究にたずさわるという事態を余儀なくされたために、経済地域区分研究に必要な統計的資料を十分に入手することができず、それ故に一八四七年の理論的研究を更に深く掘り下げることができないままに終ったと言えるようである。[53] このことは今日からみればいささか惜しいことだったと考えられるのであるが、しかしもちろんこれによって、ロシア経済地理学史上における彼の経済地域区分研究の価値がいささかも減退するものでないことはいうまでもないところである。

四

さてロシア経済地理学の発展に大きな役割を果したオガリョーフ以後、一八六一年の農奴解放令発布から一九一七年の革命に至るまでの時代にも、ロシアでは多くの人々が経済地理的研究にたずさわったのであるが[54]、それらの中で経済地域区分研究に関して注目されるのは、ペ・ペ・セミョーノフ＝チャン＝シャンスキー（P. P. Semyonov-Tyan-Shansky, 1827-1914）、デ・イ・メンデレーェフ（D. I. Mendeleev, 1834-1907）、ア・エフ・フォルトゥナトフ（A. F. Fortunatov, 1856-1925）などの研究である。

その内まずロシア地理学史上において著名なペ・ペ・セミョーノフは、学者としてまた政府の統計部門指導者としての活動に基づいて、一八七一年、ヨーロッパ・ロシアの住民の地理的配置や人口密度の分析をおこない、その配置に影響を与える諸条件の同質性によって、ヨーロッパ・ロシアを一四の「自然的地方」（estestvennaya oblasti）に区分したのである。[55] もっともこの地域区分は自然的条件と経済的条件の内、前者に重点を置いておこなわれたものとみることができるよ

うであるが、その後彼は、一八八〇年により一層新しく豊富な資料を利用して、自然的条件・人口密度・住民の職業・経済的組織・民族的要素・歴史的特色・交通におけるヴォルガ川の役割などを考慮しつつヨーロッパ・ロシアを一二の地域に区分している。その際彼はこの一二地域の下に、主に土壌などの自然的条件に基づいて更に小さい「地域」（polosa）を区分したのであるが、一八八〇年のこの地域区分は、一八七一年のそれよりは、ロシア各地方の経済的活動をかなり反映しているものとして評価されているようである。[56]

次にペ・ペ・セミョーノフよりもやや後の一八九三年には、化学者として有名なデ・イ・メンデレーェフが、ロシア商工業に関する研究の中で、工業に対するより良い認識のためにロシアを一四の地域に区分している。この場合彼は、工業発展の見地から各地域の特色をみていくことを考え、とくに人口密度・生産物や原料輸送のための交通条件・安価な燃料をうるために各地方が有する条件などに注目したのであるが、しかし一八九六年にフォルトゥナトフは、メンデレーェフのこの地域区分は科学的な統計的基礎が一貫しておらず、経済的地域区分というけれども、実際は気候上・人類学上・経済上の諸要素の混合物としての地域区分だという批判を加えているようである。もっともその後メンデレーェフは、一九〇六年に自然的および経済的特徴によってロシアを一九地域に区分し、更に各地域における最も本質的な経済的要素の指摘、工業発展との関連における各地域の特色づけをおこなっている。[57]

ところでペ・ペ・セミョーノフやメンデレーェフによるこれらの研究は、前者がより農業中心であるのに対して、後者はより工業中心であるというような評価の他に、その具体的な経済的資料の豊富さや各地域についての充分なる記述などの点から、一九世紀後半のロシア経済に関する諸事情をかなり示唆してくれるものとしても評価されているのであるが、[58] しかし一方彼らの研究においては、地域区分研究の理論面に関してあまりふれていないのであって、こうした地域区分の方法論上の問題を論じたこの時代の研究としてあげられるのが、一八九六年に発表されたフォルトゥナトフの論文である。

「ロシアにおける農業地域の問題について」と題するフォルトゥナトフのこの論文は、ロシア経済地域区分に関する最初の歴史的概観とアルセニェフ、ペ・ペ・セミョーノフ、メンデレーェフなどの研究に対する考察をおこなったものであるが、その中で彼は、従来の地域区分における科学的原則の欠如を指摘し、それ故に今や科学的地域区分を創造する必要があるということを主張したのである。そのために彼は、「何らかの特徴によって他の部分から区別され、地図上に正確に標示されるところの地表の一部分」という地域についての定義、「少数の最も重要な特徴」による「比較的大きな地域への国の分割」という地域区分に関する認識、経済地域区分の基礎に数量的特徴を置くべきだという考えなどを提示したのであるが、しかしこうした定義などからある程度うかがえるように、またたとえば、農業地域区分に際しては土壌や気候など各地方の自然的条件の数量的特徴を結合させていくことが重要だとしても、実際にそのような数量的特徴を取り出してくることは不可能であるところに非常なむつかしさがあると彼自身も認めているように、フォルトゥナトフは科学的地域区分の必要性を正しく主張しながらも、その定義や認識をはなはだ抽象的なものに終らせてしまったのである。そのことは、彼が経済地域区分に際しては社会的条件を考慮すべきだとしながらも、それではいかなる社会的条件を考え、またその条件の役割を決定的なものとみるのか否かなどということは全く明確にしていないところなどにもあてはまると言われるのであるが、その他に彼は、地域区分は国家政策の実施の上に大きな意義を持っているとし、そこから当時すでにロシア各地方に形成されていた経済的地域とは著しい食い違いをみせていた行政的地域区分を重視し、県という行政単位が経済地域区分設定の際にも重要であるなどと考えたのであって、このような点からみれば、彼の地域区分理論はオガリョーフなどよりも社会的・経済的・歴史的視点が若干欠けていたと言いうる面を持っていたとすることができるであろう。(59)

さて、一八六一年頃から一九一七年にかけての時代における経済地域区分研究としては、これらの他にも、フォルトゥナトフと同じく地域区分は国家行政のために必要であり、それは自然的条件と人口密度・民族的特色・住民の職業などを関連

させて考察することによって正しくおこなえるとしたデ・イ・リフテル（D. I. Rikhter）の研究、豊富な商工業および交通関係の資料に基づいてヨーロッパ・ロシアを一二の地域に区分し、更にそれを一〇六五の小地域に細分したところのヴェ・ペ・セミョーノフ＝チャン＝シャンスキー（V. P. Semyonov-Tyan-Shansky）を中心とする人々による研究、農業地域区分に関するア・イ・スクヴォルツォフ（A. I. Skvortsov）やア・エヌ・チェリンツェフ（A. N. Chelintsev）の研究等々多くのものをあげることができるのであるが、[60] 今日のソ連経済地理学からみてこの時代における最も重要な研究は、ロシアでの経済地域の形成・発達の過程を資本主義の発展との不可分の関連性において論じた研究、すなわち一八九九年ヴェ・イ・レーニン（V. I. Lenin）が発表した論文「ロシアにおける資本主義の発展」であろう。[61] しかし、資本主義ロシアについての最初のマルクス主義的経済地域研究として、更にマルクス主義的理論を経済地理的方法論の上に置く端緒をなした研究として、その後のソビエト時代における経済地理的研究あるいは経済地域区分研究の基礎となったこの論文については、彼の他の研究と共にまた機会を改めて考察していきたいと思う。

五

ところで今まで記してきたような一八世紀から二〇世紀初めにかけてのロシアにおける経済地域区分研究については、今日のソ連経済地理学者達の間には若干の評価の違いがみられるのであるが、この小文の終りにあたって、このことに関して少しふれておくことにしたい。

さて、革命前の経済地域区分研究に対する評価の違いということになると、とくにアルセニェフやペ・ペ・セミョーノフ、メンデレーェフなどの研究についての評価においてそれが著しいようである。すなわちユ・ゲ・サウシキン（Yu. G. Saushkin）が、アルセニェフは経済地域区分の理論と実践の上に堅固な基礎を築いたとし、またエヌ・ペ・ニキーチン

(N. P. Nikitin) が「当時の経済地理的著作におけるすぐれた現象であったところのカ・イ・アルセニェフの多くの研究は、一九世紀の革命前ロシアにおける科学の発展に新しい道を開いたものであった」と述べ、[62] あるいはサウシキン達がアルセニェフと当時の保守的学者達との間の論争を重視し、更に彼やゲルマンの研究がデカブリスト達の行政的地域区分に関する改革計画に強い影響を与えたとするのに対し、[63] ア・エス・ヴェトロフ (A. S. Vetrov) はサウシキンやニキーチンの評価には経済地理学の発展の歴史を単純にみようとする態度がうかがえるとし、一九世紀前半にはまだ何らの経済地理的理論も存在しておらず、それ故にアルセニェフも何ら理論的な経済地理的命題を提起してはいないと述べ、またペ・エム・アラムピエフ (P. M. Alampiev) もアルセニェフと保守的学者達との論争は経済地理学史上では第二義的な問題であり、更にアルセニェフやゲルマンはデカブリスト達に影響を与えるほどロシアの行政的地域区分について考察してはいないとし、こうした論争を重視したりあるいは彼らの研究とラヂーシチェフやデカブリスト達の研究とを同等にみることなどによって、あたかもアルセニェフなどの思想が革命的なものであったかのように言うのは誤りであると主張しているのである。[64] このことはペ・ペ・セミョーノフやメンデレーェフに対する評価においても同様であり、彼らの研究がやはり地域区分の理論と実践に非常な貢献をもたらしたとするサウシキンなどに対して、[65] 彼らは確かに経済地理学の上に多くの業績を残したのではあるが、それと同時に彼らがブルジョア的社会思想の持主であり、それ故にそこから生じてきた様々のブルジョア的限界や欠点が彼らにあったことを忘れるべきではなく、こうした点を解明することなしに、その肯定的面だけをみようとする態度は、一九世紀末から二〇世紀初めのブルジョア的社会思想の階級的方向をあいまいにしてしまうものだという批判が出ているのである。[66] その他ラヂーシチェフやオガリョーフなどの研究に対する見解の中にも若干の差異があるけれども、[67] やはり最も注目すべきものは前記のようにアルセニェフなどについての評価の違いであろう。

この点に関連してアラムピエフは、革命前ロシアの経済地域区分研究には本質的に異なる二つの流れ、すなわちラヂーシチェフ、デカブリストの人々、オガリョーフなどのように当時のロシアの社会経済機構を批判し、行政的地域区分の改革をも計画したところの革命的あるいは進歩的な研究の流れと、アルセニェフやペ・ペ・セミョーノフなどの「忠良なる臣民」（vernopoddannaya）としての学者・官吏が、国家行政の利益を考慮しつつおこなったところの研究の流れとが存在したとしているが[68]、この内前者の流れは、思想的面やオガリョーフの地域区分概念などから、現代のソビエト経済地域区分とのつながりも幾分考えられるのであり、そのために、レーニンの研究と比較した場合などにみられるようなそれらの研究が有する若干の限界は認めつつも、やはり今日多くの人々が高く評価しているのであって、その間の見解の違いというものがそれほど顕著にあらわれてこないのに対し、後者のいわゆる「忠良なる臣民」達の研究については、評価の違いがかなり明瞭に出てくるのであり、結局、革命前の研究の内、これらの研究を今日どのように評価するかが一つの問題になってくるのである。

そこでこれについて再びアラムピエフの考えを紹介してみると、彼はアルセニェフやペ・ペ・セミョーノフその他の人々が各地方に関する豊富な資料を収集・整理し、それに基づいておこなった経済地域区分研究は、当時のロシアの経済事情をある程度客観的に映し出しているのであり、その意味においてこれらの研究は、今日ソ連各地における経済的発展の特色や経済地域の形成過程などを解明する上にいくらか役立つものであるとするのである。しかしそれと共にアラムピエフは、これらの研究が時には偶然によるものも含めて、ただ単なる任意の統計上の特徴や自然的条件などにおける同質性に基づいておこなわれたものであって、そこには充分に科学的な経済理論を基礎として持っていない以上、たとえそれが経済現象の認識に若干の意義を持ちえたとしても、根本的には現象の表面をみているだけで、その本質までも解明することは到底できないという、いわば統計上の「カルタ占い」（pasiyans）とでも言いうる研究であったことを忘れてはいけな

いとしている。要するにアラムピエフは、革命前の経済地域区分研究にはそれぞれいくつかのすぐれた点が認められるのであるが、そうかと言ってこれらの研究とソビエト時代における研究との間に横たわる原則的違いを無視あるいは過小評価してしまって、革命前の研究がそのままソビエト時代へ受けつがれて発展し、それが社会主義建設に必要な問題をも解明しうるものであったかのように言うのは全くの誤りであることを指摘するのである。(68)

それ故に彼は、現在ソ連経済地理学者の間に若干みられる傾向、たとえばベ・ア・ヴァリスカヤ（B. A. Valiskaya）による次のような主張、すなわち「我々のソビエト地域区分と革命前の時代の地域区分との間の原則的差異の基礎として横たわるところの改革（preobrazovanie）という目的と認識（poznanie）という目的との根本的違いにもかかわらず、改革と認識との間のある一定の関係をも同じようにみてはいけない。すなわち改革のためには認識が必須であり、認識は改革への努力を生み出す。また改革の過程自身も認識のために非常に多くのものを与えるのである」という主張(70)にみられるように、革命前とソビエト時代の経済地域区分が直接的につながってはおらず、その間には原則的差異が存在していることを認めながらも、革命前の研究を「認識」的性格を持つものとして、また一方ソビエト時代の研究を「改革」的性格を持つものとしてとらえていくことによって両者の関連を見出そうとする傾向に対しても批判を加えるのである。何故ならば、アラムピエフによれば、確かに認識は改革のために必須ではあるが、しかし「改革への努力」は別の過程から生み出されるものであり、現にソビエト時代の経済地域区分は、社会主義革命後の欠くべからざる必要によって生まれ、国民経済の計画化から発展したものであって、諸地域についての認識の結果として単純に導き出されたものでないことは明らかだというのである。そして更に重要なことは、ヴァリスカヤのような考えの人々が、革命前とソビエト時代との経済地域区分の間では全く異なっているところの社会経済的機構や階級的内容に対する具体的な考察もせずに、両者の差異を「認識」と「改革」という抽象的面からみようとする態度を取っていることであり、このような態度は、両者の間に横たわる最も

根本的な差異、すなわち、革命後の国民経済が革命前とは本質的に異なるところの社会主義の道を進んでおり、これに応ずる経済地域区分の任務も、革命前とは全く異なるものになっていることを等閑に付してしまうような考えにつながっているとみることもできるというのである。[71]

ところで、こうした革命前とソビエト時代との研究の間の本質的な違いを常に忘れるべきではないということは、すでに一九二〇年代にイ・ゲ・アレクサンドロフ（I. G. Aleksandrov）やその他の人々も指摘していたところなのであり、[72]筆者としても、もしマルクス主義的経済地理学の立場に立つのならば、革命前ロシアにおける経済地理的研究に対しては、アラムピエフなどの言うように、ソビエト時代とは根本的に異なるところの社会経済機構や思想的側面を内包するものとしての分析を進めた上で評価を与えていくのが当然であろうと考えるものである。しかし、それでは何故、今日のソ連経済地理学者の中にこうした分析をおこなっていないと批判されるような傾向がみられるのであろうか。筆者の浅見からすれば、その一つの原因は、サウシキンやニキーチンなど革命前の研究を過大評価しているとされる人々が、この小文の最初にふれたところの経済地理学を地理的科学の一学科とする考え、いわゆる「単一的地理学」の考えを支持する人達であるというところに存在しているように思われるのである。

すなわちサウシキンやニキーチンなどによれば、ロモノーソフは地理学を「単一的統一体」（edinoe tseloe）としての地球の外貌を研究するものと考えて、その中に住民や経済の地理を含めたり、経済的問題を自然的条件との関連の下に解明することを示したのであり、こうしたロモノーソフの観念に基づいた一八世紀ロシアの経済地理学は、その記述の中に自然地理的資料を包含することや経済的見地からの自然的条件の評価などをおこなったのであって、そのことがアルセニェフの研究において、経済地理学がより一層発展するための基盤となったのだと言うのである。更に彼らは、アルセニェフも経済地域研究のための自然地理的資料の重要性を強調したのであり、彼もその創立のために活躍し、一八四五年に設立されたロシア地理学会は、アルセニェフの研究との関連において、統計学すなわち経済地理学を地理的科学の中に含めたのだ

とするのである。また、地理的科学の中に経済地理学を含めるというこの概念は一九世紀後半にも維持され、ロシア地理学会はこの認識の上に立って経済地理学の発展に大きな役割を演じ続けたのであり、たとえば、学会指導者の一人であったペ・ペ・セミョーノフも、地理的科学は数理地理・自然地理・統計学すなわち経済地理・政治地理・人類学を含むものとし、このような概念が学会活動の本源であり、またこれによって、学会によるすぐれた研究成果を保証することができると主張したと言うのである。その他、アルセニェフは経済に対する自然的条件の影響に注目していたが、当時支配的であった環境決定論からはきわめて遠いところにあり、環境を変化せしめるところの人間の労働に大きな意義を与えていたなどとしているが、要するにサウシキンなどが強調したいところは、「革命前の時代のすぐれた著作における地理的科学としての経済地理学の形成」、更に自然的条件に対する経済的評価など、「地理的科学としての経済地理学」の下での「経済地域区分問題の広汎な提示」というものが、「ロシア経済地理学の歴史的発展における特質」なのだということにあるとみられるのである。(73)

しかし一方においては、前記のようにアルセニェフなどは、統計学と政治経済学との関連性もある程度考えていたのであって、結局、彼らが統計学をどのような科学として位置づけていたかについては更に分析する必要があるだろうが、(74) いずれにせよ、革命前の経済地理的研究に対するサウシキンなどのこうした見解が、地理的科学としての経済地理学の確立、人類社会への自然的条件の間接的影響に対する考察の必要性等々を主張する「単一的地理学」の概念と密接に関連していることは明白であり、これから考えれば、彼らが、革命前ロシアの経済地理的研究方法が今日の弁証法的唯物論などと本質的に異なるものであることを認めながらも、やはり現在の自分達の主張とのつながりを求めるという傾向に大きく影響されて、たとえば、「カ・イ・アルセニェフは経済地域区分の理論と実践に確固とした基礎を置いた人であり、一九世紀前半における最初の最も立派な経済地理学者、高い天賦の才能を有し、明晰にして大胆で、ロシアの地理と歴史に非常

に通暁していた経済地理学者であった」というような評価を出してきたのも、[75] ある意味では当然の結果であると言えるのではないかと思うのである。

おわりに

いかなる科学分野においても、その過去の時代における研究を評価するに際しては、色々と検討すべき問題が多いと思うのであるが、経済地域区分を含む革命前ロシアの経済地理的研究についての評価に関して言うならば、やはりすでに記したように、これらの研究とソビエト時代の研究との間における本質的な違いを充分に理解し、その認識の上に立って経済地理的理論の発展過程を解明していくことが必要であり、そうした分析に基づいて、革命前の研究が有する肯定的面と否定的面とを明確に見分けていくことが大切だろうと考えるのである。このようにみるならば、「単一的地理学」を支持する人々による革命前ロシアの経済地理的研究に対する評価には、いささか疑問に思われるような傾向、すなわちソビエト経済地理学を革命前の経済地理的研究がそのままの形で継続・発展してきたものであるかのようにみ、それによって革命前の研究を過大に評価するような態度がうかがえるとも言えるのであるが、こうした傾向を克服していくためには、やはりこれも革命前における研究であり、しかも現代のソビエト経済地理学の出発点とされているところのレーニンの諸研究について考察し、それを一つの大きな指標として、革命前の他の人々の研究を検討していくことが更に重要ではないだろうかと思うのである。

この小文においては、経済地域区分に関連する考えを含む経済地理的研究の概念をはじめて提示したロモノーソフ、それを発展させて経済地域区分の原則的問題を考えたラヂーシチェフ、一九世紀前半に自然的条件や経済的条件によってロシアの具体的な地域区分をおこなったゲルマンやアルセニェフ、そして一九世紀中葉、はじめて経済地域区分の理論的問

題を検討したオガリョーフ、更にその後、豊富な資料を利用して地域区分をおこなったペ・ペ・セミョーノフやその他の人々について、とくに経済地域区分の理論的な面に関する問題を中心にして簡単にふれてみたのであるが、もちろん革命前にはこれらのほかにも経済地域区分に関連する多くの研究がみられたのであり、これについては前記のレーニンの研究などと同様にまた機会を改めて紹介してみたいと思うものである。

更にこれら革命前における研究に対しては、前記のようにかなりの評価の違いがみられるのであるが、こうした評価の違いを生み出している要因の一つには、それぞれの立場からする現代の経済地域区分理論の存在ということが考えられるのであり、[76] これはまた現代のソ連経済地理学を考察する上には非常に重要にして興味のある問題であるが、これについてもいずれ考察してみたいと思う。

註

① これについては改めて註釈を加えるまでもないであろうが、たとえば一九六四年のソ連地理学会第四回大会の決議においても経済地域区分研究の重要性が強調されている。（Izvestiya Akademii Nauk SSSR, seriya geograficheskaya, 1964—No. 5, str. 11）。

② 拙稿、単一的地理学及び経済地理学をめぐって（人文地理、一四巻六号、六一～七七頁、昭和三七年）。拙稿、ソ連地理学界における一つの問題（名古屋大学文学部研究論集、XXXXII 六一～七三頁、一九六四年）。

③ 結局、原資料を引用あるいは解説しているところの著述によることが多かったが、なるべく多くのこのような著述に目を通すことによって正確を期することにした。

④ Nikitin, N. P.: Istorichesky obzor razvitiya otechestvennoy ekonomicheskoy geografii (V Baransky, N. N., Nikitin, N. P., Saushkin, Yu. G.〔red.〕: Otechestvennye ekonomiko-geografy XVIII-XX vv., 1957, Moskva. なお、この書については、以下 V sb. O. e. -g. と記す）str. 5（以下 Nikitin: と記す）。

⑤ キリロフについては、Iofa, L. E.: Ivan Kirilovich Kirilov (V sb. O. e. -g.) str. 74—77. Lebedev, D. M.: I. K. Kirilov (V Lyudi Russkoy nauki; Geologiya. Geografiya, 1962, Moskva) str. 317—324 など参照。なお、キリロフの書の正式の題名は「ピョートル大帝の並々ならぬ努力によってはじめられ、ここまで導かれたところの全ロシア国家の繁栄せる状態」である。

afii, 1962, Moskva. なお、この書については、以下 V sb. M. v. e. g. と記す) str. 266 (以下 Vetrov : 1 と記す)。新しい国家機関設立計画は一七五九年に政府に提示したといわれる。なお、一七六五年に設立された「ロシア自由経済学会」(Rossyskoe volinoe ekonomicheskoe obshchestvo) はロモノーソフのこの考えを手本にしたものといわれる。(Vetrov : 1. str. 266. Voskoboynikova, S. M. : M. V. Lomonosov i rayonnoe geograficheskoe izuchenie strany, 1962〔ただしこの論文は、AN SSSR : Referativy zhurnal (ソ連科学アカデミー、論文紹介・抄訳雑誌) 7A67, 1963. によるし)。

⑩ Vetrov : 1. str. 266. Grekov, V. I. ; O rabotakh M. V. Lomonosova v oblasti geografii, 1962 (ただしこの論文は、AN SSSR : Refe. zhur. 1A26, 1963. による)。

⑪ 一七六〇年から六三年頃にかけてのメモにおいて、この名称を示したといわれる。なお、彼は「経済地図」(ekonomicheskaya landkarta) の名称も考え出したという。(Saushkin, Yu. G. : K dvukhsotletyyu termina "ekonomicheskaya geografiya" 〔Vestnik Moskovskovo Universiteta, seriya V, Geogr., 1961—No. 5〕 str. 24—27. Dik : 1. str. 128 その他)。

⑫ このアンケートについては、とくに Dik : 1. str. 120—122, 130—139。Dik は、この三〇問の内十一問がもっぱら経済地理的研究に関連したもので、他は自然現象と関連させたものが多いとみているが、Grekov などは、自然研究に関連したものは五問だけで、他はすべて経済的研究に関するものだとしている

⑥ タチシチェフについては、Tatishchyov, V. N. : Izbrannye trudy po geografii Rossii, 1950, Moskva. Iofa, L. E. : Vasily Nikitich Tatishchyov (V sb. O. e. -g.) str. 78—85 などを参照。彼の著作としては、「ロシアの歴史および地理の叙述についての序説」(一七三七年)、「ロシアの歴史・地理・政治・民事事典 (未完)」(一七四五年)、「ロシア史 (略称)」(一七四六年) などがあるが、ここにあげた地理学に関する定義は、「ロシア史」の第四三章「地理学全般およびロシアについて」による。(Tatishchyov : Ibid. str. 211)。

⑦ 各分野におけるロモノーソフの業績については、Morozov, A. A. : Lomonosov, 1961, Moskva を参照。

⑧ ロモノーソフの地理的研究全般については、Morozov : Ibid. str. 551—590. Dik, N. E. : Deyatelinosti i trudy M. V. Lomonosova v oblasti geografii, 1961, Moskva (以下 Dik : 1 と記す)、Vestnik Moskovskovo Universiteta, seriya V, Geografiya, 1961—No. 5, str. 5—34 などを参照。とくにその経済地理的研究については、Dik : 1. str. 127—144. Dik, N. E. : Mikhail Vasilievich Lomonosov i evo znachenie dlya ekonomicheskoy geografii (V sb. O. e. -g.) str. 86—92 (以下 Dik : 2 と記す)、その他の論文を参照。

⑨ 一七四九年の目解については、Vetrov, A. S. : Ob otsenke dorevolyutsionnovo nauchnovo nasledstva sovetskoy ekonomicheskoy geografii (V Alampiev, P. M., Feygin, Ya. G. 〔red.〕 : Metodologicheskie voprosy ekonomicheskoy geogr-

（Grekov : op. cit.）。筆者としても、これは各地方の経済的特色を研究するためのものだったと考えるものである。

⑬ 一七六三年のロモノーソフの研究は「経済事典について」であるが、要するに彼は、ロシア各地の生産物を概観しうる事典を作成することを計画したのである。（Vetrov : 1. str. 267. Dik : 2. str. 91—92）。

⑭ Vetrov : 1. str. 267. Lyashchenko, P. I. : Istoriya narodnovo khozyaystva SSSR (I), 1952, Moskva, str. 420。なお、ロモノーソフの社会経済的思想については、その他に AN SSSR : Ocherki istorii SSSR. XVIII v. vtoraya chetverti, 1957, Moskva, str. 433—441 など参照。

⑮ リィチコフについては、Iofa, L. E. : Pyotr Ivanovich Rychkov（V sb. O. e. -g.）str. 93—98。一七六二年の論文「オレンブルグ県の地誌」がある。

ソイモノフについては、Vetrov, A. S. : Etapy razvitiya nauchnoy mysli v oblasti ekonomicheskovo rayonirovaniya v dorevolyutsionnoy Rossii (Izvestiya AN SSSR, seriya geogr., 1958—No. 6) str. 80（以下 Vetrov : 2 と記す）、Lebedev, A. M. : F. I. Soymonov (V Lyudi Russkoy nauki, 1962) str. 298—305。ここにあげたのは、一七六一年の論文「古い諺、シベリアはもうかる場所」である。

チェボタリェフについては、Alampiev, P. M. : Ekonomicheskoe rayonirovanie SSSR (I), 1959, Moskva, str. 46（以下 Alampiev : 1 と記す）・Nikitin : 1. str. 10。一七七六年地理学教科書「ロシア帝国の地理的体系的記述（略称）」において、モスクワ地方と東・西・南・北の計五地方にロシアを区分した。

プレシチェーフについては、Alampiev : 1. str. 47. Vetrov : 1. str. 270. Nikitin, N. P. : Sergey Ivanovich Pleshcheev（V sb. O. e. -g.）str. 99-103。一七八六年「現在の新らたに整えられた状態におけるロシア帝国の概観」において、主に気候によって北緯五七度から北の地方、五七度から五〇度の地方、五〇度より南の地方の三地域にロシアを区分した。

⑯ ラヂーシチェフの文学的業績については、たとえば、米川正夫、ロシア文学史、一九五一年、一五～一七頁。スローニム、神西・池田訳、ロシア文学史、昭和三二年、四八～五〇頁など参照。その社会思想などについては、ソビエト科学アカデミー、江口・野原・林監訳、世界史、近代3、一九六一年、九七一～九七六頁・Lyashchenko : op. cit., str. 423—424. AN SSSR : Ocherki istorii SSSR. XVIII v. vtoraya polovina, 1956, Moskva, str. 489—499 など参照。

⑰ 金子幸彦訳、ペテルブルグからモスクワへの旅（抄）、ロシア文学全集第三五巻、古典文学集、昭和三四年、一六九～一九一頁、解説は四四四頁。なお、前掲、世界史、近代3でもこの作品の内容に若干具体的にふれている。

⑱ 経済地理学に関連したラヂーシチェフの研究については、Nikitin, N. P. : Aleksandr Nikolaevich Radishchev i geografiya（V sb. O. e. -g.）str. 104—110（以下 Nikitin : 2 と記

す)、その他の論文。シベリアについての記述は「シベリアへの旅行メモ」「シベリアからの旅行日記」など。ヴォロンツォフは、ラヂーシチェフが商務省官吏であった頃の上司である。この手紙については、Vetrov : 1. str. 268—269. Nikitin : 2. str. 108—109。

⑲ この論文は「法規について」と題するもので、これについては、Nikitin : 2. str. 109—110. Vetrov : 1. str. 269。

⑳ ゲ・エヌ・グラリ、経済管区制の歴史に関する問題（ヴェ・エフ・ワシュチン、エヌ・ア・コワレフスキー監修、橋本訳「経済地理学の諸問題」所収、昭和十一年）、二七四〜二七五頁・Feygin, Ya. G. : Razmeshchenie proizvodstva pri kapitalizme i sotsializme, 1954, Moskva, str. 249。この結果、シベリアは全域で一県とされたようである。

㉑「全ロシア帝国諸県統治のための制度」というエカテリーナの行政改革については、グラリ、前掲書、二七五〜二七七頁・Feygin : Ibid. str. 249. Alampiev : 1. str. 42. Ocherki istor. SSSR. XVIII v. vtor. polov. str. 290—294 など参照。

㉒ 一世紀半の間における変化としては、一八六一年に郡の下に郷(volosti)という行政単位が設定されたことと領土拡張による若干の県の増設があったにすぎなかったという。（グラリ、前掲書、二七六頁）。食い違いの例としては、たとえばポクロフスカヤ村（現在エンゲルス市）は経済的にはヴォルガ川対岸のサラトフに依存しているのに、行政的にはサマラ県に入れられ、約四〇〇キロも離れたサマラ（現在クイビシェフ市）に従属していたし、また一九世紀後半になると、繊維工業中心としてのオレホヴォ＝ズェヴォ村は行政的には二分され、オレホヴォ村はウラヂミール県に、ズェヴォ村はモスクワ県に入っていたなどである。（Feygin : Ibid. str. 250—251）。

㉓ 彼はシベリアを五〜六県に区分したり、ヨーロッパ・ロシアのいくつかの県を合併することが必要だとしたようである。(Feygin : Ibid. str. 252. Alampiev : 1. str. 42—43)。

㉔ ムラビョフは「憲法案」において、一三の国家 (derzhava) とモスクワ、ドンの二州(oblasti)、その下に五六九の郡 (uezd)、更にその下に男子人口五〇〇〜一五〇〇人単位の郷 (volosti) を考え、またペステリは「ルースカヤ・プラウダ」において、一〇州と三公地（または首都的都市）(udel)、各州は五県 (guberniya) または区 (okrug) から成り、その下に郡、更にその下に男子人口一〇〇〇人単位の郷を考えたようである。(Feygin : Ibid. str. 253. Alampiev : 1. str. 43)。

㉕ ラヂーシチェフは言うまでもないが、ロモノーソフにしても、その計画がいわば封建的農奴制社会の外側にあったために、結局、彼の考えや研究が遂行されないままに終ってしまったとみられるのである。(Vetrov : 1. str. 267)。

㉖ ソビエト科学アカデミー、世界史、近代3、九一九〜九四〇頁・近代4、一九六二年、一四五〜一四七頁、二一一〜二一三頁・Lyashchenko : op. cit., str. 397—496 など参照。

㉗ プレシチェーフについては、註⑮参照。チャルコフについては、Bernshteyn-Kogan, S. V. : Mikhail Dmitrievich Chulkov

(V sb. O. e. -g.) str. 116—120 を参照。チャルコフの著書としては一七八一年から八八年の「ロシア商業の歴史的記述（略称）」が最も著名であり、現在もこの書はロシア経済史研究に多くの資料を提供してくれるものとして評価されている。その他、当時の状況などについては、Vetrov: 1. str. 270—271. Alampiev: 1. str. 47. Nikitin: 1. str. 13。

㉙ ゲルマンについては、Valiskaya, B. A.: Karl Fedorovich German (V sb. O. e. -g.) str. 121—126. Vetrov: 1. str. 271—272 など参照。彼の統計学に関する見解は、「この科学を教える人のための統計学一般理論」（一八〇九年）にあり、またその一八一九年の著作は「ロシア帝国に関する統計学的研究」である。その八地域は、北部諸県、バルト諸県、ヴォルガ水源付近諸県、中央ロシア諸県（東部と西部）、白ロシアとリトワニア、小ロシアすなわちロシア・ウクライナとポーランド・ウクライナ諸県、ステップ地帯諸県、シベリアである。なお、これについては、Kabuzan, V. M.: Narodonaselenie Rossii. V XVIII-pervoy polovine XIX v., 1963, Moskva, str. 20—23 も参照。

㉚ アルセニェフについては、Baransky, N. N.: Konstantin Ivanovich Arseniev (V sb. O. e. -g.) str. 134—140. Pertsik, E. N.: K. I. Arseniev i evo raboty po rayonirovaniyu Rossii, 1960(ただしこの論文は、AN SSSR: Refe. zhur. 7E67K, 1961. による)、その他。

㉛ 一八一八年頃の著作としては、「ロシア国家統計の概述」「簡潔一般地理学」などがあるが、前者において地域区分をおこなったのである。その一〇地域は、北部、アラウン（ペテルブルグ、ノヴゴロド、プスコフ、ドヴィリ、スモレンスクの諸県）、バルト、低地、カルパチア、ステップ地帯、中央、ウラル、カフカス、シベリアである。(Baransky: Ibid. str. 135)。

㉛ アルセニェフは地域区分の目的について、「それ（地域区分）は学ぶ者に大きな便宜を与える。何故ならば、各県の自然状態を互いに別々に習得する代りに、今やただ一〇地方だけを覚えればよいのであり、それ故に労力を五分の一に減じたのである」と述べたという。(Alampiev, P. M.: Ekonomicheskoe rayonirovanie i evo mesto v ekonomicheskoy geografii (V sb. M. v. e. g.) str. 118〔以下 Alampiev: 2 と記す〕)。

㉜ Vetrov: 1. str. 272—273. Vetrov: 2. str. 81. Alampiev: 1. str. 47—48。

㉝ Baransky: op. cit., str. 138. Saushkin, Yu. G.: Vvedenie v ekcnomicheskuyu geografiyu, 1958, Moskva, str. 58 (以下 Saushkin: 1 と記す)・Nikitin: 1. str. 14. 註㉘参照。

㉞ 一八四八年の諸地域は一八年のそれと大体同じであるが、ただその境界がかなり修正されているようである。その他、四八年の著作については、Baransky: Ibid. str. 136—137, 139—140. Vetrov: 1. str. 276。

㉟ オガリョーフの経済地域区分研究については、Khorev, B. S.: O roli N. P. Ogaryova v istorii Russkoy nauki o rayonirovanii (Izvestiya AN SSSR, seriya geogr., 1963—No. 2)

str. 99—109. Nikitin, N.P.: Nikolay Platonovich Ogaryov o rayonirovanii Rossii (V sb. O. e. -g.) str. 152—161 (以下 Nikitin: 3 と記す). Alampiev: 1. str. 42—46. Vetrov: 1 および 2 などの論文を参照。

㊱ ソビエト科学アカデミー、世界史、近代5、一九六二年、三〇九～三三二頁. Lyashchenko: op. cit., str. 475—580 など参照。

㊲ たとえば、一八四二年には大蔵省による「ヨーロッパ・ロシアの産業地図（略称）」が出版され、五三年にはペ・クリュコフ (P. Kryukov) の「ヨーロッパ・ロシアのマニュファクチュア工業力概観」というテキストを添付したその改訂版が発表されたりした。(Vetrov: 2. str. 81)。

㊳ 一八〇〇年から六一年までに少くとも一五の地域区分の試みがあったという。(Nikitin: 1. str. 16)。

㊴ オガリョーフが批判した論文は、最初「内務省雑誌」(Zhurnal ministerstva vnutrennikh del) (一八四七年) に掲載され、のち「モスクワ通報」に転載されたものである。ただ無署名であるためにその筆者については色々と意見があり、ニキーチンは、それはアルセニェフであるというヴァリスカヤの考えを疑問視し、またアラムピエフは、その筆者はエヌ・イ・ナデジーン (N. I. Nadezhdin) ではないかとしている。(Nikitin: 3. str. 153. Alampiev: 1. str. 44)。

㊵ Khorev: op. cit., str. 100. Alampiev: 1. str. 44—45. Vetrov: 1. str. 273—275。

㊶ この地域区分はロシアを次の一二地域に区分した。中央又はモスクワ周辺諸県、北部諸県、ヴォルガ諸県、ウラル諸県、ステップ地帯諸県、ドン・コサックおよび黒海コサック、ノヴォロシア、小ロシア、北西諸県、沿バルト諸県、カフカス、ウラルの外側の全地域。(Nikitin: 3. str. 154—155)。

㊷ たとえば、マニュファクチュア工業のモスクワ県と原料生産地であるオレル県とが共に中央グループに入れられ、経済的には互いに異なっているところのタムボフ、ザヴォールジェ、アストラハンの諸県がステップ地帯諸県として結合されているなどという批判である。(Nikitin: 3. str. 155—156)。

㊸ Khorev: op. cit., str. 101。

㊹ この論文は「地方の状況との関連においての農業に関するロシアの気候的分割について」と題するもので、一八四三年ベルリンでも翻訳されたという。これも無署名であるが、「農業新聞」編集者のエ・ア・エンゲリガルト (E. A. Engeligardt) がエム・シマリッツ (M. Shmalits) の協力を得て作成したものといわれる。なお、その農業地帯は、氷、ツンドラ、森林および牧畜、大麦、ライ麦および亜麻、小麦および果樹、とうもろこしおよびブドウ、オリーブ・絹・甘庶の八地帯である。(Nikitin: 3. str. 157—158)。

㊺ Khorev: op. cit., str. 101. Vetrov: 2. str. 82. Nikitin: 3. str. 158。

㊻ 「生産能力」と記したが、もちろん「生産力」としてもよい。これらについては、Khorev: Ibid. str. 100, 103. Alampiev:

1. str. 45. Nikitin : 3. str. 156。

㊼ Feygin : op. cit., str. 254。

㊽ Khorev : op. cit., str. 101. Vetrov : 2. str. 82. Alampiev : 1. str. 45。

㊾ 社会経済的関係や交通に関連して次のように述べている。「こゝ（ザヴォールジェ地域＝ヴォルガ中・下流左岸の地）は、同一の土壌を有するステップであり、小麦が同一の方式で作られ、全く同一の生産物が全く同じヴォルガの波止場への販路を目指しているところのステップである。どんな種族であろうとも、住民は同一の関心によって生活している。全地域は土壌と人間労働の同一性によって一つの全体に結合されている。ザヴォールジェの農民達は自己の耕地のために同じように未耕地を探し求め、全く同じ地方で同じ労働によって雇われる。ザヴォールジェの商人達は全く同一の生産物を買い占める。ザヴォールジェの地主達――この巨大な土地における農場経営者――は全く同一の利益を追求し、全く同一の活動領域にある。そしてそれは、ペンザ、タムボフ、シムビルスク（サマルスキー郡を除く）諸県の地主達のようにライ麦を蒔き、耕地を転換せず、造酒工場への穀物の販路について配慮しているところのヴォルガのこちら側（右岸）におけるサラトフの地主達の活動とは全く異なっているのである」「たとえば、ザヴォールジェが小ロシア（ウクライナ）人によって居住されているにもかかわらず、交通は小ロシアの小麦地方とザヴォールジェとに全く異なった特徴を与えている」と。その他、オガリョーフの見解については、Khorev: Ibid. str. 101, 103. Alampiev : 1. str. 45―46. Vetrov : 1. str. 275。

㊿ 一八五六年の論文は「北極星」誌上に出された「ロシアの諸問題」（第一章）。(Khorev : Ibid. str. 105―106. Nikitin : 3. str. 158―159. Alampiev : 1. str. 43)。五九年のものは「理想」誌上に発表されたもので、その九連邦は、中央ロシア、沿バルト、ポーランド＝リトワニア、白海、ヴォルガ、ウクライナ、ノヴォロシア又は黒海、ウラル＝シベリア、アムールである。(Khorev : Ibid. str. 105. Nikitin : 3. str. 159)。六一年の論文は「コーロコル（鐘）」誌上の「新しい年一八六一年に」。その区分は、白海、沿バルト、白ロシア、リトワニア、中央又は真の大ロシア、ウラル、沿カスピ、ドン・コサック、小ロシア、ノヴォロシアであって、最後の三地方を一つにして黒海地方を形成するものとしてもよいとし、またシベリアは太平洋へ向うに従っていくつかの地方に区分されるべきであり、ポーランドには完全な自決権を認めるべきだとした。(Khorev: Ibid. str. 105. Nikitin : 3. str. 159―160. Alampiev :1. str. 44)。その他、オガリョーフの連邦構想については、Khorev: Ibid. str. 108―109 を参照。

(51) 一八六二年には一六の区（okrug）に、六三年には七地方（oblasti, kray）に区分する考えを示し、また七〇年には人民蜂起の準備という見地から問題を提起したようである。しかしこのような区分は、経済地域区分とまた若干意味を異にするものであったことはもちろんである。(Nikitin : 3. str. 160―161)。

(52) 前掲「新しい年一八六一年に」において示したという。(Khorev : op. cit., str. 103)。

(53) なお、オガリョーフは、資料的問題やそのためには一冊の本が必要になるだろうということから、ロシアの具体的な経済地域区分については何も示さなかった。ただ、彼は一八六〇年に中央大ロシア州として次の三地方、すなわちロシアのマニュファクチュア工業の代表であるモスクワ地方（モスクワ、リャザン、カルガ、トゥーラの諸県、ニージニィ・ノヴゴロドおよびヤロスラウ県の一部）、ロシアの「黒パン貯蔵庫」である黒土地帯諸県（シムビルスク〔サマルスキー郡を除く〕、ペンザ、タムボフ、サラトフ〔ヴォルガ右岸〕の諸県とニージニィ・ノヴゴロド県の一部）、サラトフスコェ・ザヴォールジェ地域（ヴォルガ左岸のシムビルスク県南東〔サマルスキー郡〕からオレンブルグ県南西〔ブズルスキー郡〕を含め、南へほとんどアストラハン県付近まで延びるところの地方）という三つの地方を示したようである。今日、こうしたオガリョーフの記述や彼の理論に基づいて、その具体的な経済地域区分が色々と推定されている。(Khorev: Ibid. str. 102—103, 106—107. Nikitin: 3. str. 154)。

(54) この時代における経済地域区分の試みは二六を下らないという。(Nikitin : 1. str. 32)。

(55) ペ・ペ・セミョーノフの経済地理的研究については、Saushkin, Yu. G. : Pyotr Pyotrovich Semyonov-Tyan-Shansky kak ekonomiko-geograf (V sb. O. e. -g.) str. 228—235 (以下 Saushkin : 2 と記す)・その他の論文を参照。一八七一年の論文は「帝国住民の分布を条件づけるところの原因に従ってのヨーロッパ・ロシアの人口」。その一四の地域は、黒土非ステップ、黒土ステップ、森林、黒土砂質粘土地帯、クリミアおよびカフカスの山麓・丘陵、ステップ非黒土（カスピ低地）、西部辺境、中央工業地帯、ペテルブルグ工業地帯、ミンスク低森林地帯、北部白ロシア低森林地帯、ノヴゴロド＝フィン低森林地帯、ヴォログダ＝ヴャトカ低森林地帯、ウラル低森林地帯、極北である。(Saushkin : 2. str. 229—230. Alampiev : 1. str. 48—49)。

(56) 一八八〇年の論文は「ヨーロッパ・ロシアの土地所有と住民地点の統計」。その一二地域は、極北、湖辺、沿バルト、モスクワ工業地域、中央農業地域、ウラル周辺、ヴォルガ下流、小ロシア、ノヴォロシア、南西地域、白ロシア、リトワニアであり、またその下に、たとえば中央農業地域を、中央黒土非休閑地、東部黒土半休閑地、転移地、営業森林地の四つに細分したりした。なお、八〇年の地域区分は、一九二〇年代にも「ゴスプラン」(国家計画委員会、GOSPLAN) などにおいて利用された。(Saushkin : 2. str. 231—232. Alampiev : 1. str. 49)。

(57) メンデレーェフの経済地理的研究については、Nikitin, N. P. : Ekonomiko-geograficheskie raboty Dmitriya Ivanovicha Mendeleeva (V sb. O. e. -g.) str. 252—261 (以下 Nikitin : 4 と記す)、その他の論文を参照。一八九三年の論文は「ロシアの工場工業と商業」。その一四地域は、中央又はモスクワ、

バルト又はペテルブルグ、北部、東部、シベリア、中央アジア、カフカス、南部、南西部、北西部、小ロシア、中央穀物又は黒土、フィンランド、ポーランドである。一九〇六年の論文は「ロシアの認識のために」。その一九地域については手許の文献では不明。なお、この二つの論文については、Nikitin: 4. str. 257—258, 260. Alampiev: 1. str. 49—50. Vetrov: 1. str. 277—278. フォルトゥナトフの批判については Alampiev: 1. str. 50。

(58) Alampiev: 1. str. 49. Vetrov: 2. str. 83—84。

(59) フォルトゥナトフについては、Nikitin, N.P.: Aleksey Fedorovich Fortunatov (V sb. O.e.-g.) str. 269—275. Vetrov: 2. str. 84—85. Nikitin: 1. str. 31 を参照。とくに彼の見解については Vetrov を参照。なお、一八九六年の論文はロシア自由経済学会の紀要に発表されたものである。

(60) リフテルの論文は、一八九八年「自由経済学会紀要」に発表された「自然的および経済的指標に基づきヨーロッパ・ロシアを諸地方に分割する試み」である。(Alampiev: 1. str. 50—51. Nikitin: 1. str. 29)。

ヴェ・ペ・セミョーノフなどによるものは、一九〇〇年の資料（六〇万の商工企業カードを利用したという）により一九一一年に発表した「地域ごとのヨーロッパ・ロシアの商業および工業」。ヴェ・ペ・セミョーノフを中心として、エヌ・エム・シトルプ (N.M. Shtrupp)、カ・ゲ・ゴルブコフ (K.G. Golubkov) が編集にあたった。(Alampiev: 1. str. 50—51. Nikitin: 1. str. 30)。なお、ヴェ・ペ・セミョーノフについては、Valiskaya, B.A.: Veniamin Pyotrovich Semyonov-Tyan-Shansky (V sb. O.e.-g.) str. 284—289 を参照。

スクヴォルツォフの研究（一九一四年）は自然地理的条件に、チェリンツェフの研究（一九一〇年）は農業機構などにそれぞれ基礎を置いた農業地域区分研究である。その他、イ・ア・ステブート (I.A. Stebut) やヴェ・ゲ・バジャエフ (V.G. Bazhaev) 等々の研究がある。(Alampiev: 1. str. 51—52, 54. Vetrov: 2. str. 82)。

(61) レーニン全集、第三巻所収。なおこの論文と経済地域区分問題との関連について簡単にふれているものとしては、Alampiev: 1. str. 56—58. Vetrov: 1. str. 278—279. Vetrov: 2. str. 85—87. Nikitin: 1. str. 34—35. その他多くのものがあげられる。

(62) Saushkin: 1. str. 58. Nikitin: 1. str. 25。

(63) この論争についてはすでに若干記しておいたが、バランスキーによれば、一八二一年にペテルブルグ大学の保守的教授達が、アルセニェフの講義の中での「自由な労働が農民をより生産的にし、国民の自由というものが工業へのより良い奨励になる」「国民は政府より前に存在するものである。それ故に国民は政府よりも重要であり、我々は最も重要なる対象としての国民について語らねばならない」などといった発言を取り上げ、アルセニェフやゲルマンほか二人の教授達に対し、「彼らの考えは社会的秩序と富を破壊するものである」という非難を浴び

せたことにはじまり、一時は文部省が四人を刑事法廷に引き渡すことを決定するまでに至ったが、結局、一八二七年にアルセニェフなどが大学を去ることによって終りを告げた事件である。なお、アルセニェフは、この事件以後は農奴問題について非常に慎重な態度をとるようになり、時折「忠良なる臣民」としての自己の気持を表明したといわれる。(Baransky: op. cit., str. 137—138)。その他、この論争や彼らの研究とデカブリストの計画との関連については、Nikitin: 1. str. 14—15. Saushkin: 1. str. 58. Alampiev: 1. str. 48 (サウシキンの別の論文からの引用がある) を参照。

⑭ アルセニェフは、地域区分というものを何らの理論もなく、ただ領域的差異を示すために単純に利用したところが多かったのであるなどという見解が示されている。(Vetrov: 1. str. 278. Alampiev: 1. str. 41, 43, 48. Alampiev: 2. str. 120)。

⑮ Saushkin: 1. str. 71. Nikitin: 1. str. 28, 31。

⑯ たとえば、資本主義の時代にあった彼らは、ロシアにおける資本主義の地域的発展の特色について何らの認識も持たなかったし、資本主義的生産様式のはかない将来をみることができず、資本主義を最良の社会機構と考えていたことなどがあげられている。(Vetrov: 1. str. 278. Vetrov: 2. str. 83)。

⑰ たとえばヴァリスカヤは、ロシア経済地域区分についての考えはラヂーシチェフによってはじめて示されたとするのに対し、ヴェトロフは、この概念はやはりロモノーソフにおいてはじめて示されたものとみている。(Vetrov: 2. str. 80)。またヴェトロフは、ヴァリスカヤなどはオガリョーフが経済地域区分問題への解答を与えたかのようにみているが、オガリョーフの考えはこの問題についての最初の科学的な問題提起であったとみるべきだとしている。(Vetrov: 1. str. 276)。

⑱ Alampiev: 1. str. 40—41。

⑲ たとえば、ペ・ペ・セミョーノフ、ヴェ・ペ・セミョーノフ、チェリンツェフなどの研究は、一九二〇年代の地域区分に際しても広く利用されたのである。しかし結局、理論的基礎を持たなかったこれらの研究は、当時の資本主義的経済現象さえも深く反映できなかったのであり、このことに関する批判は、すでにフォルトゥナトフやバジァエフ等々によって提示されていたという。また、統計上の「カルタ占い」という比喩は、バランスキーが一九四六年の論文において使ったものである。要するにアラムピエフは、ロシアの経済的認識についての個々の研究の業績ということではなく、社会主義建設のための応用などという面が問題になるのだとするのである。これらについては、Alampiev: 1. str. 37—39, 53—56。

⑳ ヴァリスカヤのこの見解は、一九五〇年の「地理学の諸問題」(Voprosy geografii) 第一七集において示されたものである。(Alampiev: 1. str. 40)。ニキーチンも、革命前の経済地域区分は認識的特徴を持っていたとしているが、これもやはりヴァリスカヤの考えにつながるものとみることができるかもしれない。(Kratskaya geograficheskaya entsiklopediya, Tom 3, 1960, Moskva, str. 333 〔Nikitin, N. P.: rayonirovanie

ekonomicheskoe v dorevolyutsionnoy Rossii))。

⑦1 また、生産手段の社会的所有が全く新しいタイプの建設的な経済地域区分、すなわち国全体あるいは種々の規模の領域におけるすべての生産を包含するところの社会主義的分業についての計画的な組織化を方向づけるような経済地域区分を創り出すのであり、こうしたことは、革命前の無秩序な資本主義的条件の下においては提示されえなかったものであったとしている。(Alampiev : 1. str. 40)。

⑦2 アレクサンドロフやエム・エフ・ウラヂミルスキー（M. F. Vladimirsky）などは、統計的考慮のみによっておこなわれた革命前の地域区分では、社会主義の下での国民経済政策には役立たないのであり、社会主義経済のためには全く別の見地からの地域区分が必要だとしたようである。(Alampiev : 1. str. 37—39)。

⑦3 これらの見解については、Nikitin : 1. str. 7—8, 12, 14, 17, 20, 25, 28, 32—33. Saushkin : 1. str. 49, 71。環境と人類との関係に対するアルセニェフの考えについては、Baransky : op. cit., str. 140。その他、人類社会と自然との相互作用に関するエヌ・ゲ・チェルヌィシェフスキー（N. G. Chernyshevsky）の見解などにも注目している。(Nikitin : 1. str. 24. Saushkin : 1. str. 64)。

⑦4 たとえばヴェトロフは、アルセニェフの初期の著作にみられる自然地理的資料は政治経済的資料との関連なしに示され、しかもその比重は小さいものであったとし、また一八四八年の彼の著作も自然地理学とは直接的関連はなく、むしろ資料や方法などからみて、政治経済学・国民経済史などにより多くの関連性を持つものであったとしており、こうした傾向は、その後のロシアにおける経済地理学の発展過程においても同様であったとみている。(Vetrov : 1. str. 272, 277)。

⑦5 また、アルセニェフの経済地域区分のおかげで、ロシアは経済地域区分の母国となったという。(Saushkin : 1. str. 58)。その他、ゲ・エヌ・チェルダンツェフ（G. N. Cherdantsev）なども「アルセニェフの研究は経済地理学の発展に新しい段階を劃するものであった。……彼はわが国の経済地区の全系列をはじめて確立したのである。アルセニェフの研究は地理学の一部としての経済地理学の形成に大きな役割をはたした」としている。(Cherdantsev, G. N., Nikitin, N. P., Tutykhin, B. A. : Ekonomicheskaya geografiya SSSR, 1958, Moskva, str. 7. 岡・宮鍋訳、ソヴェト経済地理概論、昭和三五年、六〜七頁)。

⑦6 たとえばベ・エヌ・セメフスキー（B. N. Semevsky）は、現在、ソ連における経済地域区分問題に関しては三つの学派、すなわち社会的生産の経済的分析のみが経済地域区分の基礎となりうるのであり、地域的分業・経済的関係等々が地域形成要因となるなどという考え（科学アカデミーを中心とする研究者達。アラムピエフやフェイギンなど）、それに関連する生産プロセスを伴うところの生産力の領域的結合が経済地域の基礎であり、国民経済の諸要素のみならず、自然資源や生産の自然的条件も

また経済地域を形成する要因であるという考え（モスクワ大学を中心とする研究者達。サウシキンなど）、また、地域の形成・発展は社会経済的領域の原因により規定され、その際自然現象は社会経済的特色を持つ原因を通してのみ作用するとし、経済地域はある一定の生産機能を遂行するところの国民経済の専門化された領域的一環であるなどという考え（レニングラード大学を中心とする研究者達。ヴェ・エム・チェトゥルキン〔V. M. Chetyrkin〕など）という三つの学派があるとしている。（Semevsky, B. N., : Voprosy teorii ekonomicheskoy geografii, 1964, Leningrad, str. 41—43)。

Studies on the Economic Regionalization in the Pre-Revolutionary Russia
—— Its Historical Outline and the Present Estimates ——

Kikuo ONO

Many geographers in Russia before the Revolution tried to make economic regionalization. In the middle of the 18th century, M.V. Lomonosov opened the new field of research, namely, " economic geography " and called attention to the regional differences of the Russian economy. A.N.Radishchev, in the late 18th century, developing this conception of Lomonosov, proposed the principle of economic regionalization, for example, saying that Russia could be divided geographically according to the economic character of each region, and argued that the administrative regionalization was to be related to the regional economic conditions. In the early 19th century, such scholars as K.I.Arseniev, K.F.German, and so on, basing on the abundant data, made regionalization of Russia according to the physical and economic conditions. In the middle of the 19th century, N.P. Ogaryov emphasized the significance of the industrial development and growth of productive power of the country in the study of economic geography, and argued that the economic regionalization had to be done by discovering the most dominant productive power in each region and by taking into account of the socio-economic relations of each region around its productive power, namely, that the regional divisions of productive powers were to be the basis of the economic regionalization, and showed the same idea as that of Radishchev as to the administrative regionalization. Ogaryov's study is regarded today as one of the most excellent achievement among the economic geographical surveys before the Revolution. In the early 20th century up to 1917, there were the studies of economic regionalization by P. P. Semyonov = Tyan = Shansky, etc., but the most

important studies in this field were those of V. I. Lenin, especially his *Development of Capitalism in Russia*, to which I will refer at another occasion.

Among the various studies of economic regionalization before the Revolution, those of Ogaryov and Radishchev are, generally speaking, highly regarded today, but there is a considerable difference in the appreciations of the works by Arseniev and P. P. Semyonov, and so on. One group of scholars estimate that Arseniev and others built the basis of theory and practice of economic regionalization and that the ideas which they conceived had a progressive meaning in those days. However, other scholars argue that, though there were several merits in their studies, there could be found no theories, and criticize the scholars who give affirmative estimate to them saying that their opinions have some tendencies to underestimate their bourgeois limitations and to ignore the underlying essential difference between the pre-revolutionary era and the Soviet era.

One reason why there is a tendency to overestimate the pre-revolutionary studies is that those scholars who overestimate them are proposing the theory of "unified geography", in which the economic geography constitutes one part of the geographic science. They say that Arseniev and others already proposed this conception. This opinion seems to have resulted in their overestimation of the achievements of the pre-revolutionary era, by relating it to their present theory.

I think that the adequate recognition on the essential difference between the pre-revolutionary era and the Soviet era is important when we examine the economic-geographical studies in the Russia before the Revolution. And addingly, it is necessary to take into account the Lenin's studies, and to use the idea of Lenin as one index.